

分厚い(966頁)の味は世代、境遇など戦争はともかく、高価(本体6300円)なのが難点だが、小熊英二著「八民主主」と「愛国」(新曜社)は刺激的で、示唆に富む。

副題(戦後日本のナショナリズムと公共性)のとおり、本書は

副題(戦後日本のナショナリズムと公共性)のとおり、本書は



議論の深化を

でも、不毛なものになってしまふ。

筆者は、55年前後までを「第一の戦後」、

90年前後までを「第二の戦後」、それ以降を「第三の戦後」と位置付ける。国際秩序の流動化が激しくなった

「第三の戦後」におけるナショナリズムは、

いかにあるべきか。難しい問題だ。

中央教育審議会の教育基本法見直し答申は、3

月にも出される見通しだ

が、これまでのような安易な議論では済まされな

きいこと。そしてその意

い。

【瀬戸純一】

「戦後民主主義」「市民「愛国心」「ナショナリズム」「公」「私」といったキーワードを、戦後の代表的思想家の言動をたどることによって、読み解こうと試みる。

痛感させられたのは、

誰にとってもあの「戦争」の意味がとてつもなく大きいこと。そしてその意

い。

い。

【瀬戸純一】